

速したことをマイナス要素ではなく、チャンスととらえて前向きな取り組みをしてきた。そのために中心商店街の衰退を最小限に食い止めることができたのである。今後も社会の変化に常にアンテナを張り巡らせ、時代の流れに合致した対策を講

じることが必要である。その際には、中心商店街を人々が利用しやすく、訪れたいと感じる街づくりを、商店街の関係者が協力して行うことが中心商店街活性化につながるのではないだろうか。

## スローフード運動の実践——埼玉県为学校給食を事例に——

齋藤 葉子

本研究では、最近注目を集めているスローフード運動（地産地消）を、埼玉県の学校給食を事例として取り上げ、それが地域の食文化や農業を守り、地域を活性化させ、現代の食生活の問題を解決するかを考察した。

スローフード運動は、現在日本全国に広まりつつあり、近年の食生活の問題の解決法のひとつとしてクローズアップされている。

学校給食は、①最も安全性が求められ、②供給量も多く、③食事教育につながられる、などの特徴がある。埼玉県は①大消費地であると同時に豊かな農産物の産地があり、②学校給食に米やパン、調味料など多くの食品を地場産原料100%で導入し、③食事教育に力を入れ、④県を挙げて地産地消に取り組んでいる。

埼玉県の学校給食では、県産米の導入から始まり、県産小麦100%のパンを全国で初めて導入し、主食、副食、調味料など様々な品目を開発・導入している。また、給食や農業体験などを利用した

食事・農業教育にも力を入れており、児童・生徒の地域農業・食材・食文化への理解も深まっている。児童・生徒・保護者にも美味しく安心できると、好評である。スローフード運動を継続・拡大していくうえでの課題は、地場産食材の数量・規格・価格が不安定なことである。また、学校給食に関係のない一般の人たちには、まだ地産地消は認知度が低く、行政等の一層の広報努力が必要と感じた。

地産地消を実践し、安全で豊かな食生活を目指している地域は、その目標に向かって様々な立場の人が努力しているので、地域が活性化されるといってよい。また、生産者・消費者が相互に顔が見えれば、生産者は不正が出来ないし、消費者は感謝の気持ちが湧く。地域の農産物・加工品が安全、美味しいと評判が上がれば、生産者は、より安全で美味しいものを作ろうと意欲的になれる。そして日本・地域の食文化の良さを学び、大切にすれば、食文化は廃れることはないだろう。

## 長崎港における海風と地形性逆転

佐藤 寛子

長崎市は底面が海面となった、盆地に近い地形となっており、その特殊な地形において発生する逆転層に興味を持った。本稿では地形の影響を受けて発達する接地逆転を地形性逆転とし、地形性逆転発達下におけるNOx濃度と気象要素（視程・湿度・天気・風向）の関係を調べることにした。研究期間は1992年から2001年までの10年間とした。

逆転層が発達していると考えられる日を探すため、荒生ほか（1980）の報告を参考にして条

件を設定し、日数を絞り込んだ。まず対象期間の天気図において九州が移動性高気圧で覆われている日を抽出したところ103日あった。

さらにその103日において前日24時から当日6時までの平均風速が1.0m/s以下となる日という条件で絞ると51日となった。この51日において地形性逆転が発達していると仮定し、気象要素（視程・湿度・天気・風向）との関係をみていくことにした。

まずNOx濃度の最大値と第2位の値を視程で

比較し、さらにその時刻が逆転発達時間帯（午前）であれば抽出し、同様に視程と比較した。どちらの場合においても相関は認められず、その原因を視程の測定方向とNO<sub>x</sub>濃度の主な測定地点の方向が全く逆であることにあると考えた。

次にNO<sub>x</sub>濃度と湿度を視程の時と同様の方法で比較すると、最大値の場合に相関が見られ、さらに湿度70%以上でNO<sub>x</sub>濃度の最大値・第2位の値をとることがわかった。これは水蒸気とNO<sub>x</sub>が共に滞留していると考えられる。

さらにNO<sub>x</sub>濃度と天気を比較した。一日の各天気の測定回数に応じて晴・主に晴・主に曇・雨の日というように4つに区別して各々の天気群のNO<sub>x</sub>濃度平均を出した。すると、雨の日の高濃度を除いては、晴から主に曇の日になるにつれNO<sub>x</sub>濃度平均の値が小さくなっていることがわかった。これは荒生ほか（1980）で示されていた好天の日の逆転発達の報告に矛盾しないと考えられる。視程・湿度と同じように逆転時間帯（午前）

で絞った場合も同じ結果となった。

最後にNO<sub>x</sub>濃度と風向を比較した。NO<sub>x</sub>濃度が最大値の場合は主にNからENEの範囲、第2位の場合は主にNからESEの範囲だった。逆転時間帯（午前）で絞った場合は最大値で主にNからNEの範囲、第2位の場合は主にNからESEの範囲だった。これらの結果のうちNO<sub>x</sub>濃度が第2位の値の時において、荒生ほか（1980）の報告による主にNからEの90°の範囲よりも大きい、NからESEの範囲となったことはさらに追求する余地がある。

以上、NO<sub>x</sub>濃度と気象要素（視程・湿度・天気・風向）の関係を見てきた。中でもNO<sub>x</sub>濃度と風向の関係には荒生ほか（1980）と異なる結果が出たため、これから追求する余地を残すこととなった。また、本稿では議論の対象としなかった逆転発達の年・月別の偏りについても今後の議論を望まれる。

## 変容する横浜中華街

重田 信子

横浜中華街は、雑然とした雰囲気と極彩色の中華風建築で彩られた「本物の中国文化」が味わえる場として、強力なイメージを形成し発信してきた。これにより、マイノリティーコミュニティであるエスニックタウンでありながら、横浜を代表する観光地となった。

しかし、2003年から中華街は、「中華街大通り商店街環境整備事業」に着手し、元町のような大人の落ち着いた街並みの形成を目指している。このような見解が出てきた要因には、第一に経済要因が挙げられる。中華街での消費金額は、官々接待批判の煽りや屋内型チャイナタウンの誕生、長引く日本経済の不況の影響などから、1997年の7割程度に落ち込んでいる。そのため中高年層をターゲットとする戦略へとシフトし利益回復を図ろうとしている。中高年層の消費金額は平均以上であることに加え、来街者数も増加傾向にあり、リピート率も高い。中華街関係者は、「100万人の観光客よりも10万人のリピーターが欲しい」と述べている。

第二は文化要因である。横浜中華街では華僑の現地化（華人化）が進行している。近年は日本語使用者が多数派となりつつあり、今回の改装が日本人の「癒しブーム」という、日本文化の受容ともみなすことが出来る。しかし一方で、改修工事の際に、本物の中国の街並みに戻すことを意図したり、関帝廟や牌楼を保持したりするなど、中国文化に固執する面もある。これらの現象は、日本社会での生活が長期化するに従い、彼らが多様なアイデンティティを構築している現われであると考えられる。

横浜中華街は、華僑が日本社会で生きのびる為に集団化し、戦略的に築いてきたコミュニティである。街はとりまく経済状況に応じて中華空間を演出してきたが、2世3世の華僑へ代替わりをするに従い、日本文化と中国文化のハイブリッドなアイデンティティ保持者や日本アイデンティティ保持者は、この街を見世物としての空間ではなく自分達が暮らしやすい街へと変革しようとしている。周囲と同じような日本風